

雄弁は火になった論理である

文責：演練幹事

序

本稿が語るのは、単なる「喋り方」の方法ではない。本稿が語り掛けるのは、単なる「能弁家」の理論ではない。本稿において取り上げるのは、雄弁家が「雄弁家」たるがための手段である。

弁論を構成するあらゆる側面には、その存在理由がある。いつ、どんな文章の後に、どんな言葉を使うのか。その一連の流れを、どのように体现するのか。そして、独善を嫌う聴衆に対し、いかに応えていくのか。そのどれもが欠かしようのない側面であり、どれかひとつでも欠けさせてしまうのであれば、その人間はただの「話者」なのである。

弁論は、糸を縫い合わせて出来上がる、一枚の布のようなものだ。すべての要素が絡み合い、強固に折り重なり、弁論は初めて雄弁家のものになる。その時、そこにはひとつの綻びも存在してはならない。あるいは、雄弁家は、その綻びを繕う方法を知っていなければならない。雄弁家が弁論をする時、そこからは1本の糸も抜け落ちてはならないのだ。

キケローは、その著書『弁論家について』の中で、こんな風に述べている。

わたしの考えるところ、誰であれ、あらゆる大事の知識、あらゆる学芸の知識を獲得しているものでなければ、すべての美点を備えた雄弁家とはなり得ないだろうと思う。なぜなら、万般の知識によってこそ弁論は華々しく飾られ、豊かに満ちあふれるものにされなければならないからである。

——キケロー『弁論家について(上)』

P20

彼は、「万般の知識」がないのならば、そんな弁論は「空疎にして笑止な言葉の流暢さにすぎないもの」であると言う。つまり、そんなものはただ「話者」が口ずさむ独り言と何ら変わりはないのである。だからこそ彼は、弁論が人々の心に入り込んでいくために、溶け込んでいくために、知識が、つまり糸の1本1本こそが、必要であると言うのである。

さて、それでは本稿の目的に立ち戻ろう。本稿で取り上げるものはなんであるか。それは冒頭でも述べたように、雄弁家が「雄弁家」たるがための手段である。それは、布を縫うための糸の1本1本であり、あるいは、時として布を繕うための方法にもなるだろう。

本稿が、会員諸兄が「雄弁家」として弁論を自ら携えんとするための、その一助になれば幸いである。

体現

声の調子や目つきや姿のうちにも、取捨選択したことばにおけるのと劣らない雄弁がある。

——ラ・ロフシュコー(仏・箴言作家)

雄弁会員が構成する弁論は、たった 3000 字程度のものである。それを、短いと感じるか、長いと感じるか。おそらく、ひとつの事象を深く語ろうとするのならば、弁論家が一様に感じるのは前者であろう。

そうであるならば、我々は須らく、伝えたいことすべてを伝えきりはしない。内容の取捨選択を繰り返し、ようやく凝縮した一稿が出来上がるのならば、その一稿の中には、途中途中で抜け落ちたいくつものピース分、なにかが欠落していることとなる。

そして、それを補うものこそが、冒頭のロフシュコーの言にあるように、「声の調子や目つきや姿」といった、いわゆる体現方法である。本項においては、「アイコンタクト」「ボディーランゲージ」「抑揚とテンポ」という項に分け、それぞれについて説明したい。

一. アイコンタクト

人の目を見て喋りなさい。

と、注意された経験はないだろうか。会話をする時には、相手の目を見ながら話をしなさい。でなければ失礼だから、と。

その、よくも分からない一種のマナーと化してしまった一言は、特に弁論においては、深い意味を持っている。

そもそも、なぜ人は相手の目を見て喋らなければ“失礼”とされてしまうのか、考えてみてほしい。想像してみれば分かるだろう。うつむき加減で喋る人。姿勢のせいなのか、長い前髪のせいなのか、口元は見えるけれど、目は見る事が出来ない。さて、どう思うだろうか。気味が悪い？　なんだか怪しい？　そう思う理由は、実は簡単である。「何を言っているかは分かるが、なんで言っているのかが分からない」。つまり、人は相手の目を見なければ、その言葉が話者のどのような感情に基づいて発されたものか分からないのである。

だからこそ、弁論においては、聴衆全体の「目を見て」言説を語り掛けなければならない。雄弁は、人格の発露である。だからこそ、弁論——雄弁——の中には、雄弁家自身の感情が必要不可欠である。そして、その感情を端的に、そして最大に体現する「目」こそが、雄弁家としての最低の基本にして、最大の武器となり得るのである。

二. ボディーランゲージ

まず、ボディーランゲージとは、いかなるものなのだろうか。ボディーランゲージとはその名のとおり、体現する「言葉」である。その言葉がいかに重要なのか、その言葉がいかなる意味を持つのか。聴衆に対し視覚的にさえも訴えられてこそ、弁論は初めて「雄弁」たり得るものになる。

では、我々は、ボディーランゲージをどのような部分に用いればいいのか。例示してこう。

また中国国防白書においては2050年までに西太平洋において米海軍と同等の戦力をもって対峙すると述べています。海洋進出や軍事活動の理由としましては2点ございます。それは、海洋資源の確保と国内の不満を外へ向けることです。

——第35回全国学生新人弁論大会・眞嶋会員の弁論より引用

つい3カ月前、神奈川県民である私は民意が議会でどのように扱われているか、県議会に実際に傍聴しに行きました。

——2013年度前期早慶新人雄弁大会・渡邊翔吾会員の弁論より引用

通常、数字におけるボディーランゲージは、片手で表せる一ケタの数字、つまり、1から5の数字に対して用いられることが多い。ここで、上記した2つの見てほしい。下線のうち、一方は手を用いたボディーランゲージが求められるものであり、もう一方はボディーランゲージの必要性があまりないものである。では、どちらがどちらか。お分かりにはなるだろう。

眞嶋会員の「2点ございます」の部分は、弁論の核となる部分である。彼の解決したい問題に対する原因の例示をする場面であるため、聴衆の注目をここで一気に引かなくてはならない。弁論の核に耳を傾けてもらうための布石、あるいは、弁論の構成そのものをより明確にするため、この部分に関しては、聴衆に対する視覚的な訴えも求められるのである。つまり、この下線は、ボディーランゲージが求められるものなのである。

一方で、渡邊翔吾会員の「つい3カ月前」の部分を見て頂きたい。これは、アジテイトの最初に据えられた文章だった。つまりこの部分は、弁論の内容に対する強調・注目よりもまず、聴衆に対する共感を求められる部分だったのである。「3カ月前」に彼が県議会を傍聴したのは、果たして弁論の核だろうか。その部分を強調する必要性はあるだろうか。言ってしまうと、その部分に視覚的効果をもたらした結果として、弁論の核における強調が聴衆に対して伝わりづらくなってしまい、という失敗も出てきてしまうかもしれない。つまり、この部分においてはボディーランゲージの必要性はあまりないのである。

また、ボディーランゲージは、数字やデータの強調だけでなく、説得の際にも利用する

場面がある。以下に例示しよう。

価値観を抑圧された人々は、今この瞬間にも増え続けています。

彼らは命を失う恐怖に怯え、未来の見ない現実涙しているのです。

しかし私たちは、そんな彼らを救うことができます。

目を凝らし、耳を傾け、手を差し伸べられるのならば！

そして今こそ、その時です。

幼い少年や少女が、笑顔で語れる未来のために皆さん、今、この手を！

——2013 年度前期早慶新人雄弁大会・吉原会員の弁論より引用

上記は、弁論の結びの部分に用いられたものである。人々に対する共感を求める際には、この部分をただ読むだけでなく、手を振り上げる、あるいは拳をぐっと握る、など、様々な動作を併用することによって、他者に対する視覚的な説得を試みることが出来るのである。

三. 抑揚とテンポ

弁論において必要不可欠な要素が、言葉の発し方、つまり、「抑揚とテンポ」である。単調な声調は、往々にして人々を退屈にさせるものである。お経のような弁論に、果たして聴衆はどれだけ注意を傾けていただけるだろうか。また、単調な声調の最大の問題は、弁士の訴えなければならない部分が一体どこにあるのか分からない、そう聴衆に思わせてしまうことである。「大きな声で、はきはきと」は、雄弁家には求められていない。弁士は、声調によって感情の波を弁論の中に体現してこそ、初めて雄弁家たり得るのである。

ここで、抑揚とテンポを仔細に分析した、2006 年前期の演練会議レジュメを引用する。

——以下引用——

例えば感情的に訴える場面は、一般的に高い音程での主張が効果的である。逆に冷静さが要求される時は、低い音程が要求される。その組み合わせは過度にならない程度連続が許される。つまり荒ぶる感情の発露の局面に於いて、その強烈で圧倒的な声調は連続して、繰り返して主張するのは、聞き手に対して効果的な説得に繋がるが、それが過度に陥ると、聞き手は我々の言説そのものを疑う。このように弁論における抑揚や工程は弁論全体と自らの主張内容とのバランスを常に念頭に置きながら構成する必要がある。

参考までに自らの主張内容に合わせた一般的な声調の一例をここに記す。

人を威圧する(嵐のイメージ)→低い声での強く大きな声調

人を興奮させる→短い音の繰り返し、速い大きな声調

人を悲しませる→低く、ゆっくりとした静かな声調

人を喜ばせる→高い音の連続と明るい大きな声調

——以上引用——

では、これに基づいて例示してみよう。

私たちの会話の大半は、野菜の話です。①おばあちゃんはいつも楽しそうに、自分の畑の話をします。私は、そんな、活き活きとしたおばあちゃんが大好きです。

しかしある時、おばあちゃんがポツリと呟いた一言は、いつもとは少し様子が違いました。

(中略)

②この土地の、この長閑さを、緑の豊かさを、繋いでいきたい。世代が変われど、人が変われど受け継がれてきたこの風景を壊したくない。顔を見て、直接話をして、自分の畑で出来た野菜を美味しいと言って買っていつてくれる人たちに、いつまでもいてほしい。でも、それを守ってくれる人はいない。

③そう語るおばあちゃんの腰は、小さく丸まるように、曲がっていました。

④後継者問題。

現在の日本の農業において、最も重要かつ重大な問題は、正にこれだと言えるでしょう。

——農林水産大臣杯争奪全日本学生弁論大会・吉原会員の弁論より引用

ここにおいて、4つの下線を引いた。それぞれが、上記「抑揚とテンポ」に関する各要素である。

まず①においては、ポジティブなことを語っている部分である。そのため、ここにおいて用いられるのは、「人を喜ばせる」際の抑揚とテンポであろう。

次に②においては、畳み掛けるような技法が必要となる。なぜなら、ここで聴衆に対して与えられるべき心理的効果は、「不安」だからである。だからこそ、この部分には「人を興奮させる」際の抑揚とテンポが必要であろう。

そして③においては、悲しみの表現が為されている。そのため、ここにおいては「人を悲しませる」際の抑揚とテンポが求められる。

最後に④であるが、この部分からは次第に事実の列挙が始まる部分である。事実の列挙においては、聴衆からの共感よりも、聴衆の傾聴が求められている。そのため、この部分においては、「人を威圧する」際の抑揚とテンポを用いるのが適当であると言えるだろう。

また、弁論においては、間の取り方も非常に重要となってくる。上記のように抑揚やテンポを切り替えるとき、そこになんの間もなかった場合、それは息継ぎの出来ない息苦しい弁論になってしまう。聴衆に対する心理的効果を存分に発揮するためには、弁士の与える心理的効果を聴衆が受け入れるための素地を作ることが必要不可欠なのである。

また、弁論において、野次はつきものである。そこで、その野次に対してどのように対応するのか。それは弁士の個性次第となるが、ここでは2種類の方法を挙げておこう。

- ・野次を覆うように、声調に威圧を加えていく

- デメリット：相乗効果的に、野次もまたヒートアップしてしまうかもしれない。

- ある種の持久戦のようになってしまう可能性もある。

- ・野次が鎮まるのを待つ

- デメリット：間を取り過ぎた結果、弁論の流れが分断されてしまうかもしれない。

- 野次が鎮まらない時は、よりヒートした野次に飛び込む可能性もある。

- これはその時々にも使い分けられるものであるので、参考にして頂きたい。

表現

おしゃべりと雄弁は同じではない。愚者はしゃべりまくるが賢者は話すだけだ。

——ベン・ジョンソン(英・劇作家, 詩人)

先にも述べたように、我々が弁論の中に組み入れられる要素には限界がある。必然的に内容の取捨選択を繰り返し、凝縮させていく必要がある。

では、その際に、どのような表現を用いればより「凝縮」後の弁論が効果的になるのかを語りたい。

一. 文章の簡略化

弁論、という発話による説得方法を用いるとき、文章は長文でない方が好ましい。なぜならば、視覚的に捉えていれば構成の分かる文章であったとしても、それが聴覚として感知した時、人はとたんにその文章が“見えなく”なってしまうからである。

例を挙げよう。

現在、大学進学において、私教育、つまり学習塾・予備校・家庭教師を受けることは、それを受けた高校生の9割が大学に進学しており、更に受けていない高校生のうち4割しか進学を出来ていないことから分かるように、教育関連法に縛られないその自由な教育が大学受験に効果的であるため、その役割が非常に重要なものとなっています。

——第53回花井卓蔵杯争奪全日本学生雄弁大会・二ノ宮会員の弁論を改定引用

この文章を視覚的に捉えれば、情報がいくつあるのか、それぞれどのような情報なのかは理解出来るだろう。

しかし、これが弁論という形で、発されたものであればどうだろうか。何が必要な情報なのか、弁士が伝えたいことはなんであるか、果たして聴衆に伝わるだろうか。

現在、大学進学において私教育の役割は非常に重要なものとなりつつあります。大学進学における私教育とは、学習塾・予備校・家庭教師のことです。現在、私教育を受けた高校生の9割が大学進学しております。しかし、私教育を受けていない場合、4割しか進学できていないのです。では、私教育はなぜこれ程までに大学受験に効果的なのでしょうか。その理由は、私教育が、教育関連法に縛られない自由な教育だからです。

——第53回花井卓蔵杯争奪全日本学生雄弁大会・二ノ宮会員の弁論を改定引用

ここにおいて果たされているのは、文章の短文化である。端的に、分かりやすく、更には重要な情報を伝えやすい。しかし、だからこそ、ここにおいて重視されるのは接続詞である。接続詞の使い方をひとつ間違えるだけで、一気に弁論はその意図を誤ってしまう。

二. 感情表現

雄弁家の弁論に欠かせない要素として、自らの感情に対して聴衆にどれだけ共感してもらえるか否か、ということがあることは先にも述べた通りである。クインティリアヌスは、その著書『弁論家の教育』において、「雄弁の力は、事柄の本性自体によって導かれるであろうところへ説得の対象(実際は「裁判官」)を駆り立てるだけではなく、そもそも存在しない感情を作り出したり感情を実際より大きくしたりする点にある」と述べている。

そこで本項においては、その感情表現を表現し得る最大的手段として「比喩表現」を紹介したい。なぜなら、“喩え”というものが、他者への共感を求めるにあたっては、最も有用であり、簡易なものだからである。

そもそも比喩表現とはなんであろうか。比喩表現はその字面の通り、「喩え」の表現である。大まかに分ければ「直喩(明喩)」「隱喩(暗喩)」「擬人法」が存在するが、ここでは感情表現への直接の効果を考え、前者ふたつを見ていこうと思う。

○直喩・明喩

直喩とは、比喩表現であることを“直接的に”表現する比喩の方法である。直喩の典型的な形態は、「～のような」という語尾が用いられることである。これは、表現を使う対象に対して、「～のような」という言葉を明示することによって、その表現が比喩であること、つまり、「～」が事実ではないことを明確に示すことが出来るのである。

文学作品を例に用いてみよう。

坂の中腹あたりから商店街が見え始めたとき、雑然とした店々の看板や装飾が一つ一つ、ある力強い手ごたえをもって眼の中に飛びこんできて、私はふところの中の紙幣が、水から上ったばかりの魚のようにイキイキと躍動するのを感じた。

——安岡正太郎『陰気な愉しみ』より引用

この文章からは、なにが読み取れるだろうか。悲しみ？ 苦しみ？ 違うはずだ。この文章からは、主人公の喜びや楽しさといった、ポジティブな感情が読み取れるはずである。なぜだろうか。それは、我々が「ふところの中の紙幣」が、「水から上がったばかりの魚のように」ははねないと知っており、尚且つそれを「のように」という表現で理解するからである。そして、「のように」の後には、「イキイキと躍動する」という言葉が補われている。これによって、人々はここにはネガティブな感情が存在しないことを知ることが出来るのである。

それは弁論においても同じである。弁論において、弁士の感じた、その生の感情を表現するとき、それは通り一遍の形容詞では、どうしても躍動に欠けてしまう。だからこそ、聴衆の注目を第一に集めるべき雄弁家は、その生の感情を表現し、尚且つそこに聴衆を巻き込むために、「直喩」を用いた表現を使わなければならないのである。

○隠喩・暗喩

隠喩とは、比喩表現であることを“暗に”表す表現である。つまり、直喩の「～のような」に代表される形態を一切持たないものである。人がなにかを喩えるとき、そこに「～のような」という一種の留保があれば確かに分かりやすい。しかし、それがまるで当然のものであれば、あるいは、文章の形態に対して説明過剰となるのであれば、それら表現にはスマートさが求められる。つまり、隠喩表現である。佐藤信夫は著作『レトリック感覚』の中で、このように述べている。「直喩が相手に対して説明的に新しい認識の共有化を求めるのとは逆に、隠喩は相手に対してあらかじめ共通化した直観を期待する。それゆえ、典型的なかたちとしては、直喩は知性的なあやであり、隠喩は感性的なあやであるということが出来る」

では、文学作品を例に挙げてみよう。

顔をしかめたのは介添の青二才だけであった。葦名の目の色がかすかにうごいて、笑のさざなみをふくんだやうであった。

——石川淳『野守鏡』より引用

この前後関係が分からなければ意味の分からない文章かもしれないが、これは、「いささかうさんくさく颯爽とした青年」である葦名が、供の者をつれて、とある大富豪の小生意気な娘に求婚するため顔を合わせたシーンである。この娘が求婚者に対して突飛なことを言い、その言に対して、二者二様に反応を示している。供の者である「介添えの青二才」はどうでもいい。葦名の反応を見てみれば、この場所にふんだんに使われたレトリックが分かるだろう。「目の色」「かすかにうごく」「笑のさざなみ」切り出してみて、それぞれの意味が分かるだろうか。だからこそ、隠喩は「感性的なあや」なのである。葦名の「いささかうさんくさく颯爽とした」、つまり、笑んでいるのに目は笑っていない、そんな薄ら恐ろしさが、この文章のみで的確に表現されているのである。

また、もうひとつ見てみよう。

キャプレット夫人　ヴェローナの夏でさえ、あれほどの花は咲かせまい。

乳母　はい、あの方こそ花、本当の花でございます。

——シェイクスピア『ロミオとジュリエット』

かの有名な、『ロミオとジュリエット』である。キャプレット夫人とはジュリエットの母親であり、彼女は乳母に対して、ジュリエットの婿候補の話をしている一幕が、これである。つまり、「花」とは婿候補の話であり、彼女がこの一言でも表しているように、婿候補に対して分かりやすく歓迎の意を示しているのだ。

続いて、最後のひとつは、実際に雄弁会員が弁論の中で用いた表現である。

しかし、このままいくとそれは単なる「夢」でしかありません。(中略)

私たち若者の未来には、どんよりとした暗雲がたちこめているのです。

——第二十五回日吉杯争奪弁論大会・川村会員の弁論より引用

これは、隠喩の最たる例である。弁論においての共感性を得、尚且つすっきりとした文章にすることも、また聴衆の注目を惹き付けるためのひとつの手段である。

結

いかがだろうか。

参考文献

- クインティリアヌス(2005)『弁論家の教育 1』西洋古典叢書
- クインティリアヌス(2013)『弁論家の教育 2』西洋古典叢書
- キケロー(2005)『弁論家について(上)』大西英文訳 岩波文庫
- キケロー(2005)『弁論家について(下)』大西英文訳 岩波文庫
- アリストテレス(1992)『弁論術』戸塚七郎訳 岩波文庫
- 佐藤信夫(1992)『レトリック感覚』講談社学術文庫
- 谷崎潤一郎(1975)『文章読本』中央公論社